

# はじめに

近藤 邦夫

平成9年度に新設された東京大学大学院教育学研究科附属の学校臨床総合教育研究センターでは、平成11年度までの3年間、「いじめ問題の解明と解決策の探究」に関するプロジェクト研究に取り組んできた。

その研究成果は、「学校臨床研究」第1巻の第1号～第5号として公刊される予定であるが、この「いじめ体験の諸相：回顧法による探究」（第1巻第1号）は、いじめという事象に関する最も基本的な知見の収集と解析に取り組んだ研究班の報告書である。

この研究班の目的は、いじめ研究の出発点や基礎となるような、いじめ事象に関する最も基本的な知見の収集をすることにあった。いじめに関する何らかの仮説を検証する意図も、いじめという事象を一定の切り口から描くという意図ももたず、素朴に、「いじめられた経験のある人」「いじめた経験のある人」「いじめを目撃した経験のある人」たちに、その経験を丁寧に尋ね、実際に起こっていることの全貌に近いものを実感し理解する手がかりを得ることである。そのために、できるだけいろいろな立場にある多数の人に直接に会って情報を集め、面接調査の逐語記録を研究班のメンバーで丁寧に読みなおし、そこから見えてくるものを相互に出し合って討論し、何が重要な問題か、どのような切り口によっていじめ事象の的確な理解が可能になるかを、徐々に焦点化し浮き彫りにしていく方法をとった。その過程で生まれたのが、この報告書である。

研究班のメンバーのうち、近藤、保坂、堀田、丸山の4人は、心理臨床領域で仕事をしている人間であり、教育相談やスクールカウンセリング等の心理臨床場面で、個々のクライアントの訴えを通していじめという問題に接してきた者であるが、これらのメンバーにとっては、これほど多くの人たちが多様な時期に経験した「いじめ」に触れるのは初めてであり、心理臨床場面で培ってきたいじめ理解を大きく広げるものとなった。

一方、迫田、斉藤の2人のメンバーは、社会学の領域でいじめの問題に関心を寄せてきた人間であるが、彼らにとっては、社会学的なマクロな視点ではなく、一人一人の経験というミクロな視点を通していじめ問題を見つめていくことは、極めて新鮮なことであったろう。同時

に、討論の場で一人一人の事例を検討する際に彼らが発する社会学的な観点からの問いや理解は、前述の心理臨床領域の5人にとっては、極めて啓発的なものであった。

この報告書の全体の構図は次の通りである。

「第1章 研究の方法」では、いじめ体験の心理的体験過程に接近することを目的として「回顧法による面接調査」という研究方法を用いた理由と、研究の具体的な手続きが述べられている。

「第2章 回想の中の『いじめ体験』の諸相」は、この調査で得られた知見のうち、数値によってあらわされる最も基本的な情報を整理し、そこから得られる基本的な知見を提示している。また、第3章以降で様々な方向に展開される考察の基礎となる基本的枠組みを提示している。

第3章から第5章までの3つの章は、それぞれいじめの「被害者」「加害者」「傍観者」に焦点を当て、それを独自の観点から考察したものである。

「第3章 いじめに対する対処とその発達」は、主にいじめの「被害体験」に焦点を合わせ、その体験への「対処」(coping)と子どもの「発達」という2つの観点から、いじめ体験の様相を描き出している。

「第4章 加害者に着目したいじめ集団類型」は、いじめの「加害者」に焦点を当て、加害者が他の集団成員からどのように見られている者であるかに着目し、それを手がかりにいじめ集団の類型を導き出し、いじめ行動を理解する一つの切り口を提起している。

「第5章 傍観者の意識構造といじめの集団構造」は、いじめの「傍観者」の「意識」に焦点を当て、「被害者に対する優越意識」と「加害者に対する同調意識」という2つの観点から傍観者の意識構造を類型化し、それぞれの類型といじめの展開の仕方との関連を探っている。

当研究班の研究では、当初から、いじめという現象が生じた年齢に注目し、第2章～第5章の考察においても「発達差」に関心を寄せた記述を行っているが、「第6章 いじめの背景要因としての子どもの心理発達」は、これらの記述の背後にある発達の背景の骨格を整理して示したものである。

また、最後の「第7章 いじめ研究の展望と課題：分

析視角の再検討」では、いじめに関する先行研究のレビューを独自の観点から行い、いじめ問題に関してさらに理解を深めたい読者に対する参考情報を提供している。

なお、この研究班の研究成果の報告としては、さらに

続編（第1巻第5号）として、事例研究の報告が次年度に予定されている。

いじめの問題に直面し、その解決に取り組んでいる方々に、何らかの手がかりを提供できれば幸いである。